

北条陸奥守平朝臣氏照公御影



刻印「北条氏照像」（「義烈百人一首」をもとに
故 小松敏盛氏が彫ったもの）

◇散歩のみどころ

国の史跡に指定されている滝山城跡から少林寺、梅坪、道の駅までの凡そ5kmの行程。

滝山街道から大手口・天野坂を越え小宮曲輪へとたどる。ここから城の一番北にある山の神曲輪まで山道を歩く。眼下に多摩川と対岸の風景が楽しめる所である。一休みの後、湧水を溜めたとされる大きな池跡を見ながら城の中心部の本丸へ。ここには金比羅社、霞神社、古井戸がある。本丸をあとに引橋を渡り、中の丸へ。昼食後、二の丸、千畳敷き、信濃屋敷跡を歩く。屋敷跡から脇の山道へと入り、御嶽神社へ。平安時代の作で、東京都の重要文化財の蔵王権現が安置されている。参拝して元の道に戻る。九本桜、氏照開基の金龍山少林寺へ。この後、路傍の地藏を見ながら梅坪神社へ。ここには榎本星布の扁額が掛っている。道の駅まで歩き、ここで解散。

①滝山城址 国

滝山城址は、八王子市の北端、多摩川と秋川の合流点の南側に広がる「都立滝山自然公園」の中ほどにあり、多摩川を望む標高百六十mの丘にある。

国指定の史跡滝山城は、戦国時代の中頃、大永元年（一五二一）に武蔵野国守護代の大石定重がこの城の北西一・五kmの高月城から移り築城したものと伝えられる。

定重の子定久のとき北条氏康の支配を受け、その子氏照を養子に迎えて、滝山城は大石氏から北条氏照の居城となった。氏照はさらに城を改築した。その規模雄大かつ巧みな丘陵城郭は、当時関東屈指の山城と賞賛された。本丸、中の丸、二の丸、空堀などの巧みな遺構にそれがうかがえる。

上杉謙信、武田信玄などから猛攻を受けた滝山城だが、なかでも信玄、勝頼父子による永禄十二年（一五六

九）九月の城攻めは、熾烈を極めたといわれる。後に北条氏照は領地の備えをより固めるため、南西約9kmの地に八王子城を築き、滝山城から移った。移転の時期は定かではなく、天正の中頃（一五八〇年代）と推測される。中世の貴重な城郭である。



瀧山古城跡往古蔵王権現

滝山城の築城主

滝山丘陵に山城を構築したのは八

王子の豪族大石源三定重であった。

大石は木曾義仲の流れを汲む信濃源氏の一族で、信濃国大石郷を所有していたため姓にした。延文元年（一三五六）武蔵国に移り、最初居館を設けたのはあきる野市二宮であった。とくに南北朝抗争の戦乱時代であり、

情勢の不安

から案下の山奥に山城を築き移った。

長祿年間（一四五七〜六〇）、関東

は古河公房対両上杉家との衝突が始まると、大石は山内上杉に属し、戦功を立てた。その後案下城は地理的に不便であり、高月城に引越した。

当時の領有地は西武蔵五六村という。高月在城七十有余年、大永元年（一五二一）高月の東一・五kmばかり離れた滝山に築城を開始した。

文明十八年（一四八六）太田道灌が扇谷定正に殺されるや再び山内、扇谷の権力抗争が復活。明応四年（一

四九五）、小田原の北条早雲を拠り、大石定重は北条方に属し、上杉を見限った。

● 滝山城第二の城主

戦国時代に小田原に本拠をおいた北条氏三代目の氏康は、早雲の孫にあたる。氏康は勢力を今の千葉県から埼玉県まで拡大し、各地に城をつくった。

氏照はこの氏康の三男で、今の八王子周辺を治めていた大石氏が、北条氏の支配下になった関係でその領地を継ぎ、滝山城の城主になる。その後、八王子城に移り八王子城主となった。氏照は城をつくる技術や戦いの方法、さらには周辺武将との交流にすぐれた手腕を持っていた武将であった。

しかし、天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉によって本拠の小田原城が包囲された時、氏照は主だった武将

をひきつれ、兄の四代目氏政とその子氏直（五代目城主）とともに小田原城にいた。そのため八王子城は城主を欠いたまま、六月二十三日わずか一日で落城してしまった。

その後氏直は高野山に流されたが、氏照は氏政とともに秀吉から切腹を命じられた。当主氏政はともかく、氏照もこの世から葬らなければならなかった秀吉の脳裏には、戦国武将氏照への高い評価と畏怖の念があったといえる。小田原開城三日後の七月九日、北条氏政と氏照の兄弟は、城下の田村按栖宅に身柄を移されたのち、七月十一日に自刃させられ、その首は小田原で梟首された。しかし氏照の首は、その夜半何者かが盗み出して、のち元八王子の宗関寺に葬られている。体の方は八王子市の由木の永林寺に葬られたとの伝承がある。

また、青梅市柚木の即清寺には、源頼朝、畠山重忠の位牌とともに北条氏照の位牌がある。「青霄院殿透岳

宗関大居士」という戒名を表面に、裏面には「八王子神宮寺城主 北条睦奥守氏照」と俗名を記して祀られている。これにより、北条氏照がいかに人間性豊かな武将として、地域の人々に慕われていたかがわかる。なお、北条氏照が最後を迎えた小田原城下町の田村安栖は日野市にゆかりのある西党日奉氏の一族であった。

● 滝山城最大の合戦

・永禄十二年（一五六九）三増峠（みませとうげ）の戦い。

神奈川県愛甲郡愛川町の三増付近で行われた武田信玄と北条氏照・氏邦の戦い。武田信玄が一子勝頼を奇手の総大将として攻撃し甲斐勢二の丸まで進攻する。信玄は出馬せず。武田勢の総大将勝頼は本陣を拝島大日堂し、長槍・鉄砲戦をとった。城主氏照は二の丸二階門に立ち、敵味方から見えるところで、鉄砲、狙い

矢がしばしば飛ぶ中で采配したが、結果は武田軍が勝利する。氏照はこの戦いにおいて滝山城の戦略的不備を体験した。特に小銃戦に於ける不利があることを知り、八王子に山城を築いて移城する方針をとった。



史跡 三増合戦場

● 滝山城の特徴

滝山城の主郭は本丸であり、これらの西北部には数多く曲輪群がある。本丸と中の丸の間は巨大な空堀で断ち切られて独立している。本丸には枡形虎口が二つある。一つは二の丸

からの枡形虎口で、二重虎口となっている上に、引橋が架けられた構造となっている。もう一つは西面に下るための虎口である。本丸と中の丸の間が第一の防護壁で、中の丸と二の丸の間が第二の防護壁である。

第三の防護壁は、二の丸の空堀から外へ出るための枡形虎口と馬出からなり、曲輪群を取り込むように第四の防護壁として空堀が築かれている。

第一、第二、第三、第四それぞれが重層的な防護を持つが、とりわけ、第三、第四の長大な防護壁は馬出と枡形虎口を設置するという非常に手の込んだ技巧的なものとなっている。明らかに内外の区分けが防護においても、政治的にも厳然と区分されている。

中核部の虎口には馬出を作らず、枡形虎口が多用されている。いずれも戦国末期の城郭の様相を呈しており、北条氏照の城の特徴といえる。

●大手口（城の表口）

旧甲州街道（現滝山街道）より北に入った場所に木戸があったと考えられる。さらに進むと薄暗い堀の中へと入り、急にクランクしながら小宮曲輪の下に出る。



大手口から入り、天野坂から枳形虎口へ

●小宮曲輪

滝山城内を描いた慶安古図には「小宮曲輪 屋敷」とあり、家臣の屋敷地であり、信濃・刑部・カゾノ屋敷と同様、二の丸の外側に家臣団屋敷を設け、内郭の一次防御壁を構成していた。

曲輪は東西に長い不整形で南から西に深い空堀を巡らしており、防護上重要な曲輪であった。



小宮曲輪
高い切通しを登ったところ

●山の神曲輪

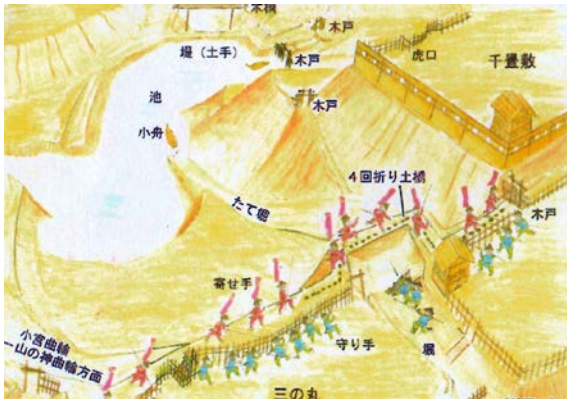
合戦が起きた時に民衆の避難場所だったところと言われている。山の神は滝山城の一番北にあり、集落の人が古くから伝えてきた民間信仰の山にある。現在は祠すらもないが、多摩川を見下ろす景色は見事である。



山の神曲輪から見た、
多摩川と昭島方面を望む

●湧水を溜めた池址

千畳敷の西側下に堰を造り、湧水を溜めたであろう池址。中心部には弁天島、船着き場も見つかっている。また池の底に黒い土を入れ、深さが分からない様にしたと言われている。城を使用しなくなった後、領民はその黒土を使って着物を染めたと伝わっている。



湧水を溜めた池址

●本丸

城の中で中心となる場所。合戦の時は、城主が立て籠もって戦う場所とされる。本丸と中の丸の間に木橋が架かっていた。ここは重要な場所で、他の曲輪から切り離され独立できるように造られている。本丸の周りには、小規模な曲輪が多く造られている。



本丸から見た多摩川昭島方面

●金比羅社

国史跡滝山城本丸櫓台に鎮座する金比羅社は、天明年代に滝村持ちで造営されたことが新編武蔵風土記稿に記載されている。江戸時代から本丸一帯は麓の滝村（現八王子市高月町滝地区）持ちで、年貢の免除地として受け継がれ（地区の氏神駒形神社境外地）ている。滝の城山とも呼ばれ、広く滝山城の名を後世に伝えている。



本丸裏にある金毘羅社

●本丸の井戸

本丸には、築城時からあると伝えられている井戸がある。しかし、本格的な調査を行っていないため、当時から井戸かどうかは不明である。この時代には主に「まいまいど」という、蝸牛形に掘っていく技法が多い。直線的に掘り下げて、内部も石積みで囲って固定する方式は少ないとする説もある。



本丸に当時からあるという井戸

●霞神社

明治四十五年（一九一二年）五月一日、当時の在郷軍人会加住村分会の呼びかけで、滝山城跡（滝地区の鎮守駒形神社の境外地）に創建した。昭和二十六年（一九五一年）、加住村遺族会が結成され、後に加住地区遺族会が引き継いで神社の維持管理を行っている。



霞神社

●引橋

中の丸から本丸に通ずる間には、深い堀（切通し）がある。そこに引橋（しきはし・しくはし）がある。この橋は、敵が攻めて来たとき、片方から引いて侵入を食い止めるためのものである。滝山城跡には数か所残っているという。



本丸から中の丸に通じる引橋

●中の丸

中の丸（曲輪）の出入り口（虎口）は、枡形虎口といい、直進の敵を防ぐ形に造られている。当時は、木戸（門）があり、簡単には入れないようになっていた。周りには土塁（土手）が残っており、隅櫓が建てられていたという。また、桜の根元に鎧武者が現れたという言い伝えもある。「南無阿弥陀仏」と刻まれた小さな石塔が建っている。中の丸北側から多摩川、秋川方面が望まれる。



引橋下からみた風景



中の丸の桜の根元にある「南無阿弥陀仏」の石碑
昔、鎧の武者が出たという伝説がある。



中の丸北側から見た全景

●二の丸

二の丸は浅い堀によって二つに分かれ、その一つが今では本丸に通じる歩道となっている。虎口は三か所あり、出入り口の先には馬出（うまだし）と呼ぶ小さな曲輪が造られている。



中の丸から多摩川を望む

●千畳敷

慶安古地図では、現在の中の丸が千畳敷と記されている。名の変遷事情も、建造物等の存在も定かではない。北側から山の神曲輪が望める。この千畳敷は、昭和まで畑として利用されていたという。



二の丸

●信濃屋敷跡

当時、信濃守を名乗れる者は大石定基ではないかといわれている。この曲輪は三ヶ所に仕切られ、三名の重臣の屋敷跡と考えられている。南東尾根続きに堀を設け、木橋が架けられている。この橋も引橋だったといわれている。また近くには、一人がやっと通れるほどの細い土橋が造られており、敵の侵入を防ぐような構造になっている。



千畳敷と西馬出



木橋



信濃屋敷跡



祠
土橋の脇の櫓跡に安置されている



土橋
南馬出の近く、カゾノ屋敷の傍

② 滝山の御嶽神社

丹木町二―二九四

勧請 金峰山金剛院が

吉野金峰山蔵王堂に遷座

祭神 日本尊命

社宝 木造蔵王権現立像

百六十cm 一体

木造十一面観音立像

百六十六cm 百六十二cm

二体

木造菩薩形立像

百五cm 一体

開創 康永二年（一三四二）

康安四年（一六五二）

二十五石の朱印状を拝領

例祭 四月十五日

滝山城址に接する小高い位置にある。丹木町・加住町の辺りは奈良の吉野山を模して、古くから修験の地として開かれていたという。御嶽神社も古くは蔵王堂と呼ばれ、修験道場として近郷の修験者が集まり護摩修業を行っていた。



御嶽神社

神社内に保存されている木造四体の仏像は、いずれも東京都有形文化財に指定されている。この立像は、平安時代の一木造りの像といわれているが、腐食が進んでいる。その外、神社脇の安置場には沢山の木造の仏像等が安置されている。



平安時代のものと云われている仏像

木造蔵王権現立像（左正面）



③九本桜

滝山城の東側を通り、少林寺方面と小宮方面に行く三差路がある。そこから小宮方面に行った左側の脇に大木の桜が生えている。根元が九本あることから「九本桜」と呼ばれている。

九は苦に繋がると言われ、花の季節に「今の苦労からお助けください」と手を合わせて願うと桜花が散り、苦労事も一緒に吹き飛ばしてくれるという説話が残っている。



九本桜

●戦国哀話

永禄六年（一五六三）北条氏照の攻撃を受け、落城した辛垣城（からかいじょう）の三田綱秀の娘笛姫は、滅亡後秋川のほとりに庵をつくり暮らししていた。あるとき氏照は狩の帰りに美妙な笛の音を聴き、その主を探させたところ笛姫であった。氏照は笛姫を滝山城に招き、一曲を所望した。笛姫は一族を滅ぼした仇敵氏照の隙を見て切りつけた。しかし、氏照も同じく笛が好きだった縁から、怨讐を忘れ滝山城にとどまるように勧めた。こうして二人の間に愛情が芽生えたとき、氏照の妻比佐が嫉妬のうえ笛姫を刺殺した。氏照は笛姫の死を哀れと思い、懇ろに弔ってやったという。



笛姫愛情の石

④金龍山少林寺

滝山町二一六六五

宗派 単立（かつて曹洞宗）

本尊 釋迦如来脇立 文殊菩薩普賢

菩薩（開基北条氏照寄進）

寺宝 釈迦三尊仏像（元龜二年北条

氏照寄進）

大般若經六百卷（安永二年）

地藏菩薩像（元和元年建立）

大涅槃画像巻軸（明治二十年

寄付）

北条氏照より拝領の鞍と鐙

北条氏照妻女（比佐の方）

寄進の茶臼と古茶釜壺個

開山 桂巖曉嫩大和尚

（氏照の乳母の子）

開基 滝山城主北条氏照

開創 元龜二年（一五七二）

徳川家光より慶安元年（一六四

八）朱印二十五石を賜る。末寺十数

ヶ寺を有し、檀家の七割は北条家臣

団の末裔である。滝山城の東南の山

麓の景勝地、滝の池のほとりに草庵

を結んだのが始まりである。場所は、四方が山に囲まれ、出入口が辰巳という四神相応の地で氏照の住居だったといわれている。

寺の南側に滝山街道があり、横山宿、八日市宿、八幡宿の地名も残り、現在の八王子町並の元がここだとわかる。

宝永年間（一七〇四～一七一二）の火災により山門、本堂、庫裡、禅堂、衆寮、開山堂、鐘楼前の二百mに及ぶ杉並木も焼失した。その後復興されたものの、明治十年（一八七七）の火災で再度堂宇を焼失した。昭和四十六年（一九七二）近代的な鉄筋コンクリートの本堂を再建。昭和二十九年（一九五四）宗派は曹洞宗より単体法人に転向している。



八王子のゆるキャラ
きたき防



本 堂 内



少 林 寺

● 涅槃図

この涅槃図の歴史は古く、約五百年前の大永七年（一五二七）頃と伝えられている。以前は、腐食が進んでいたため賦色作業を施し、現在の大きな涅槃図に生まれ変わった。



お釈迦さま



涅槃図



● 地藏菩薩

本堂の左側拝殿には、少林寺地藏菩薩像が安置されている。地藏は、釈迦入滅後、弥勒が出現するまでの間、現世にとどまって衆生を救うという。

説明板には、

元和元年（一六一五）奉安

当山五世 海雲太鯨 代

昭和六十三年（一九八八）修復

当山廿四世 大覚創元 代

と明記してある。



地藏菩薩

⑤薬師様と六地藏

少林寺に向かう滝山古路(寺谷戸、中山谷戸)の辻、右側には薬師様を中央にして六地藏が安置されている。この地藏は、八日市宿の人達によって建立されたという。また、左側には庚申塔や地藏様が安置されている。これは八幡宿の人達によって、建立されたといわれている。いずれも、無病息災、疫病退散を祈願したといわれている。また一説には、度重なる戦で犠牲になった人々の霊を慰めるためとも伝えられている。



六地藏と薬師さま



地藏尊と庚申塔



薬師さま（中央）と六地藏

◆城下町の変遷

現在の滝山一丁目、滝山街道が通る一・五km付近には、北条氏照以前の城主大石定久時代から横山、八日市、八幡の地名があり、市場が開かれていた。氏照の時代になってからは、宿場や市の推進が一層進められていった。また、滝山城下の滝山街道が通る丹木町付近には、領主に近い家臣や職人、商人(あきないびと)の集団が住む滝山宿があったといわれている。

横山、八日市、八幡の三地名は、氏照が八王子城に移ってから地名を移している。さらに現在の八王子市内に移され、町名として残っている。

また、氏照が庇護していたという極楽寺が丹木町二丁目付近に、大善寺が丹木町一丁目から梅坪町の間付近に建っていたという。そのほかに善能寺、本立寺、善龍寺も滝山城下にあったという。さらに極楽寺の

西に「みようおうした」という地名がある。「明王」と推測されることや不動明王坐像の伝えもあることから宝生寺の旧在地であったのではないかと言われている。

◆谷戸（やと・やつ）の地名

滝山城下には氏照の家臣、寺院それに職人の名前が付いた谷戸がある。

- ・鍛冶谷戸（かじやつ）

下原鍛冶の関係

- ・専国谷戸（せんごくやつ）

専国院という修験の寺院の関係

- ・寺谷戸（てらやつ）

- ・勘解谷戸（かげやつ）

中山勘解由左衛門屋敷の関係か

- ・将監谷戸（しょうげんやつ）

氏照の家臣の関係か

- ・極楽寺谷戸（ごくらくじやつ）

極楽寺との関係か

などの地名が残っている。また、蔵屋敷跡の地名も残っていることから北条領国の年貢収納蔵があったのではないかと考えられている。

◆梅坪村

この村は、滝山村の飛び地で、戸数十戸に満たない小さな分村だったという。滝山城の城主北条氏照が、梅の好きな比佐御前のために梅の里を作らせたもの。天満宮はその時、里の鎮守として京都の北野天満宮から勧請されたものといわれている。

⑥梅坪天神社

梅坪町

祭神 天穗日命（あめのほひのみこと）

社宝 北条氏照寄進とされる獅子頭

三体、江戸時代の女流俳人松

原庵星布の「神垣の外の案山

子のあつさ弓」他六十八名に

よる、文化元年（一八〇四）の

扁額、棟札五枚

創建

天安（八五七〜九）の頃、北野

威徳天神を奉斎し、「梅坪の

天神」と称した。

天神の社は、梅坪町の中央部、緑に囲まれた小高い場所にある。新編武蔵風土記稿によると、社地二百坪南向きに九尺二間の拝殿があると記されている。除地は四反一步。文化八年（一八一）子安明神、甲明神を合祀している。

現在の社殿は昭和四十七年（一九七二）に造営した。本殿は入母屋造り、拝殿は流れ造りである。境内社として稲荷社がある。新編武蔵風土記稿には、「天神社」としている。明治以降は、天神神社と呼び、八王子市史では「梅坪の天神」として記載。例祭には市指定文化財獅子舞が舞われていた。



梅坪天神社全景

ささらししまい

●梅坪町の 簞獅子舞

梅坪町に残る簞獅子舞は、旧梅坪部落の氏神である天神神社の、四月十五日の祭礼に奉納する慣わしがある。

簞獅子は大獅子、中獅子、雌獅子の三頭で構成され、その服装は紺地に小紋の竜の染抜更紗の上着に、唐草文様の裁つ着付けばかま、手つこう、たび、わらじ、腹鼓である。花笠は少女の役目で、波に千鳥の振袖一重のそろい着、赤の帯を締め、緋縮緬の前たれをたらした花笠をかぶり、ササラを持っている。

梅坪町の天神神社の神事として、永禄年間（一五五八〜一五七〇）より「五穀豊穡、悪魔退散、災難消除」を祈願するために行われ、獅子舞は氏照が獅子頭を寄進したと伝えられるように四百年余りの歴史があるものと思われる。行列は世話人、太刀掛り、山の神、花笠、横笛の順に並び、神社総代谷津家より出発。神社境内

で十二庭舞われたが、昭和四十七年の造営祝賀記念を最後に今は絶えている。舞の仕立ては石川町の竜頭の舞とよく似ているため、地元では春獅子が梅坪町、秋獅子が石川町と一対に考えている。



梅坪のささら獅子舞

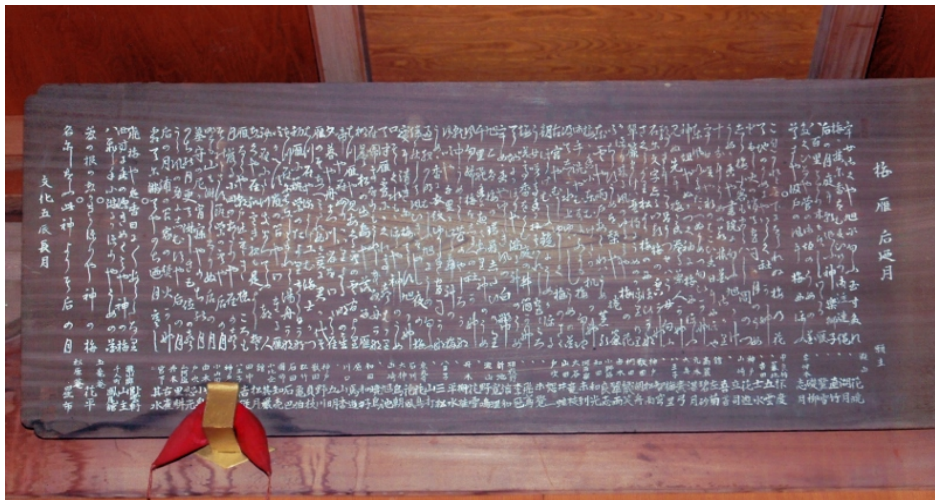


梅坪神社のささら獅子頭

●松原庵星布等の扁額

松原庵星布等の扁額が梅坪天神社に奉納されている。星布は、江戸期屈指の女流俳人である。享保十七年（一七三二）、横山本宿（現本町）榎本家に一人子として生まれた。津戸家から婿をとった。延享四年（一七四七）母の没後、継母仙朝を迎えた。彼女の影響で俳句を学び、芝紅の号を受けた。のち、第一世松原庵白井鳥酔に入門。糸明窓の号を受けた。師没後、同門の春秋庵白雄から指導を受け、天明八年（一七八八）八月松原庵を継いだ。白井鳥酔の忌日、剃髪し尼となった。寛政五年（一七九三）星布尼句集を出し、これがきっかけで天下に名を知られるようになった。特に多摩地方に大きな影響を与えた。文化十一年（一八一四）に没し、現在大義寺に眠っている。東京都旧跡に指定されている。星布辞世の句

咲く花もちれるも阿字の自在かな



俳句の扁額

⑦梅坪と滝山の地蔵様

梅坪天神社から東へ五分程歩くと新道の右側に地蔵などが沢山安置されている。梅坪町が区画整理の際、点在していた地蔵などを一ヶ所に集めて祀っているという。

また、滝山街道から少林寺へ行く入口の両側には六地藏や庚申塔が安置され祀られている。こうした滝山城周辺には、南無阿弥陀仏と刻まれた石塔、地蔵が目につく。

滝山城は、何度も敵に攻められている。永禄四年（一五六一）上杉謙信との争い、特に有名な永禄十二年（一五六九）十月一日、甲斐の武田信玄との戦いはすさまじく双方に多大な犠牲者がでている。これらの中には、家来の屍を葬るために建てられた石仏も多いという。純心学園前には、このときの首塚があるという。滝山城の桜は、植林から数十年が経ち見事である。



沢山の地藏様



梅坪と滝山の地藏さま全景



子授けさま

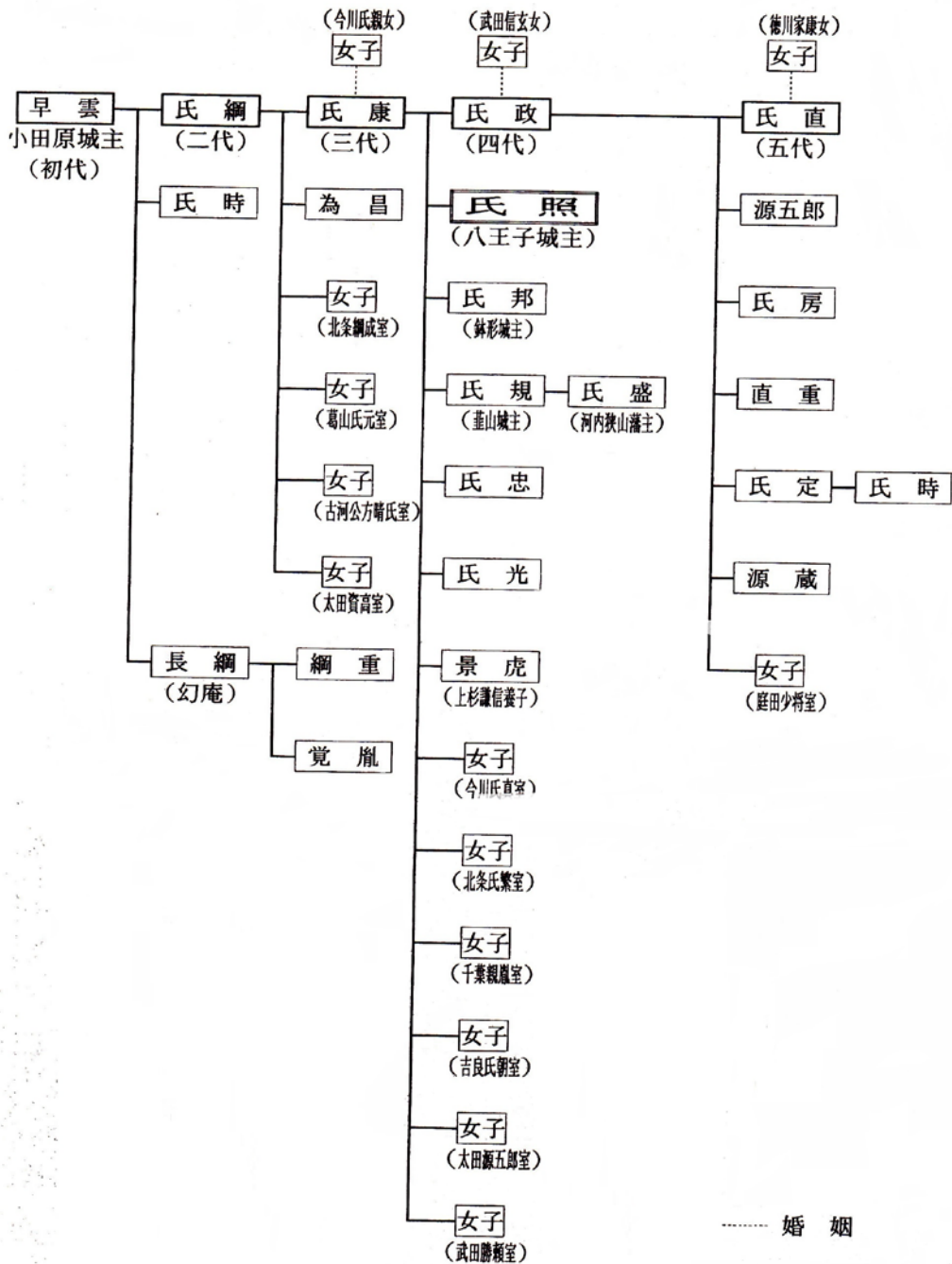
●子授け様（御嶽講）

梅坪天神社から近く、南の森に子授けの明神さまが安置されている。小さな社だが、吉野の蔵王権現に属する神社といわれ、今でも近在の人達の信仰をあつめている。

◎主な参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図会
- ・よみがえる滝山城
- ・八王子寺院めぐり
- ・八王子仏教協会青年部
- ・梅坪天神社及び少林寺資料
- ・古文書を探る会資料
- ・民族芸能
- ・中世城郭研究
- ・武蔵野郷土史刊行研究会資料
- ・多摩のあゆみ
- ・多摩信地域文化財団
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・八王子市地図
- ・滝山城戦国絵図
- ・書にみがかれた魂 小島善太郎著
- ・皇国地誌
- ・都立滝山公園資料
- ・大石氏、北条氏の系図
- ・インターネット各ページ
- ・八王子市観光マップ
- ・昭文社

北 条 氏 系 図



関東戦国史年表

和 暦	西 暦	月	事 項
永享10	1438	8	鎌倉公方足利持氏、関東管領上杉憲実と対立。(永享の乱)
11	1439	2	公方持氏、鎌倉永安寺にて自害。
宝徳元	1449	11	持氏の遺児永寿王丸、元服して成氏と称し、鎌倉公方就任。
享徳3	1454	12	公方足利成氏、関東管領上杉憲忠を殺害。(享徳の乱)
康正元	1455	1	大石房重、成氏と武蔵分倍河原に戦い討死。
		6	公方成氏、鎌倉を去り下総古河へ移る。古河公方の始まり。
長禄元	1457	4	太田道灌、江戸・岩付・河越の諸城を築く。
		12	將軍義政、弟政知を鎌倉公方とす。ただし政知、伊豆堀越に居し、堀越公方と称せられる。
2	1458	3	大石顯重、高月城に移る。
応仁元	1467	5	応仁の乱起こる。
文明8	1476	6	長尾景春、鉢形城に拠り上杉顯定に叛す。(長尾景春の乱)
		9	この年、太田道灌、相模・武蔵各地に景春と戦う。
		10	道灌、大石駿河守の二宮城を陥す。
		12	長尾景春降伏。
		14	幕府と古河公方成氏和睦す。(都鄙の合体)
		18	道灌、主人扇谷上杉定正に誅せらる。
		7	聖護院道興、大石顯重の館を訪ねる。
19	1487	2	大石顯重、亡父房重の三十三回忌法要を営む。
延徳3	1491	4	堀越公方政知死去する。嗣子足利茶々丸、継母円満院と義弟潤童子を殺害。
明応2	1493	10	駿河の伊勢宗瑞(北条早雲)、伊豆を攻略する。
4	1495	9	伊勢宗瑞(北条早雲)、小田原城を奪取する。
永正元	1504	9	扇谷上杉朝良、山内上杉顯定と武蔵立川原に戦う。
16	1519	8	伊勢宗瑞、伊豆韭山に死去。
18	1521	2	大石定重、滝山城に移る。
大永4	1524	1	北条氏綱、江戸城攻略。扇谷朝良は河越城に敗走。
		10	氏綱、青梅勝沼城に滞在。
天文6	1537	7	氏綱、河越城を攻略。城主扇谷上杉朝定、松山城に敗走。
		10	北条氏綱死去。
		14	山内上杉憲政・扇谷上杉朝定ら河越城を包囲。
		15	北条氏康、河越城を救援。扇谷朝定討死。(河越夜戦)
			大石・三田氏ら武蔵の諸豪族、北条氏の軍門にくだる。
		21	山内上杉憲政、越後に赴き長尾景虎(上杉謙信)を頼る。
弘治3	1554	7	氏康の娘今川氏真に嫁ぐ。(駿河・甲斐・相模三国同盟)
			この頃北条氏、多摩を直轄支配し寺社の棟別銭を免除する。
永禄2	1559	11	北条(大石)氏照、宮本彌吉職を安堵する。この頃、氏照は滝山城に入城する。
		3	長尾景虎、関東に出馬。青梅の三田氏、景虎に属す。
		4	越後勢、滝山城を攻撃か。
			景虎、上杉の家名を譲られ、上杉政虎と称す。
			上杉政虎帰国後、氏照は三田氏を攻め滅ぼす。
11	1568	12	武田信玄、駿河今川氏真を攻撃。三国同盟破れる。
			氏照、上杉輝虎に同盟締結を打診。
12	1569	3	上杉輝虎、同盟に同意。
		9	武田信玄、関東出馬。滝山城を包囲し攻撃。ついで小田原城を攻撃し帰国。
元龜2	1571	10	氏康死去。越相同盟破棄。甲相同盟復活。
天正6	1578	3	上杉謙信死去。二人の養子(景虎・景勝)の家督争い起こる(御館の乱)。氏照、弟景虎の援軍として越後出陣。
			武田勝頼、上杉景勝と結ぶ。
		7	氏照、織田信長の元に使者を送り、好を通ず。
		9	氏照家臣並木氏、八王子番を勤める。
		10	武田氏滅亡。本能寺の変、織田信長死去。
		16	豊臣秀吉に備え、八王子城の防備を固める。
		18	八王子城落城。まもなく北条氏滅亡。